

特集

スナメリ

●文・写真: 白木原美紀
(東邦大学理学部東京湾生態系研究センター訪問研究員)



写真1 福岡市「マリンワールド海の中道」で飼育されているスナメリ
(中原史生氏撮影)

スナメリは沿岸で目撃されることが多く、その生息域の近くに住む人々から、永く愛され親しまれてきた存在です。しかし、その生態はあまり知られていません。近年、一部の海域では漁業による混獲などでその生息数の減少も懸念されています。今号では、長年スナメリの調査に取り組んでこられた東邦大学の白木原美紀さんに、スナメリの生態と保全についてご執筆いただきます。

1.はじめに

スナメリ(*Neophocaena asiaeorientalis*)は人間ぐらいの大きさの小型のイルカです。全身灰白色でくちばしの突出は明瞭でなく背びれはありません(写真1)。

台湾海峡から中国、韓国、日本にいたる水深50mより浅い沿岸域に分布しています。水族館で飼育されていることもあり、名前を聞いたことがある人は多いかもしれません。スナメリは岸からすぐ近くの海に姿を見せることがあり、漁業者や船舶職員、釣り人には馴染みのあるイルカです(写真2、3)。九十九里浜ではサーファーにも親しまれています。沖合で波待ちしてい

る時などに近くに現れるそうです。イルカウォッチングの対象にもなっています(写真4)。本稿では、私たちにとって最も身近な海で暮らしているイルカの1種スナメリの生態と保全について紹介します。

2.分布域

日本では、主に、仙台湾～東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海～玄界灘、九州の大村湾、有明海・橘湾の5つの海域に分布します(図1)。海域間では形態および遺伝的な差異が見つかっていて、各々を別の個体群として保全の単位とすることが支持されています。仙台湾と鹿島灘の間、九十九里浜沖と東京湾の間の海域ではスナメリの発見が減少します。そのため、仙台湾～東京湾のスナメリは複数の個体群からなる可能性を指摘する研究者もいます。

3.生活史・食性・行動

スナメリの繁殖や年齢に関する情報は、漁網で混獲されたり、海岸に漂着したり、水族館で飼育されたりしている個体から得られています。コドモは80cmほどの大きさで産まれます。1産1子が普通です。有明海・橘湾のスナメリは秋から春に出産すると考えられています。その他の海域では春から夏にコドモを産むと考えられています。オトナになって繁殖が可能になるのは4～6才、妊娠期間は約11ヶ月、出産間隔は2年に1回と推定されています。野生下で推定された最高年齢は25才ですが、鳥羽水族館の飼育個体が28年余り生存したことがあります。ミルクで育てられたコドモは生後4～6ヶ月で小魚やイカを食べ始め、6～15ヶ月で親から独立すると考えられています。スナメリは表層から底層にいたる様々な動物を採餌しています。胃の中からはコノシロ、マイワシ、カタクチイワシ、ハゼ類、テンジクダイ類、



図1 日本におけるスナメリの分布



写真2 岸近くを遊泳するスナメリ



写真3 港内に入ってきたスナメリ



写真4 スナメリウォッチングの様子

イカ・タコ類、エビ類などが発見されています。

海では通常1、2頭の小さな群れで泳いでいますが、時に100頭を越える大きな群れを作ることがあります。この理由は、たまたま餌生物が集まっていたから、サメが出現したからと言われていますが、よくわかっていません。ジャンプなどの空中行動は少なく、他のイルカのように船首波に乗って泳ぐことはありませんが、戯れるように船尾波に乗ることがあります。

4. 生息数

中国の長江に分布する亜種ヨウスコウスナメリは個体数の減少が著しく、IUCNのレッドリストで絶滅危惧IA類(CR)に分類されています。日本周辺でも個体数の減少した個体

群が知られています。瀬戸内海のスナメリです。

瀬戸内海は700以上の島々が点在する風光明媚な海で、島々を結ぶフェリーが多く走っています。これらのフェリーからスナメリを目視して、生息数を推定したチームがいます。第1回目の調査は1970年代後半に実施されました。彼らは20年余り経た1990年代後半に第2回目の調査を行い、この間に瀬戸内海のスナメリの生息数がどのように変化したのか算出しました。驚くべきことに、スナメリの生息数は、瀬戸内海の中・東部海域では20年前の10%に、西部海域では62%に、中・東部海域の沿岸域については3%にまで低下していました。この結果が公表されて以降、日本でスナメリの保全に関する

機運が高まったと言っても過言ではありません。

1990年代後半以降、スナメリの生息状況が調べられたことのない海域でも調査が開始されました。スナメリの生息数は、スナメリの発生する鳴音の数や、目視された発見数をもとに推定されていますが、すべての生息地で複数回にわたって試みられている方法は飛行機からの目視調査です(写真5~7)。スナメリは体色、外部形態が独特で、調査対象海域にはスナメリと混同する他の生物がいません。風がなく白波の立つことのない穏やかな日であれば、高度150mの上空から、青い海を悠々と泳ぐスナメリをたやすく見つけること



写真5 飛行機目視調査に使用するセスナ



写真6 調査中のセスナ機内



写真7 スナメリが生息する鹿島灘



写真8 上空から撮影したスナメリ

ができます(写真8)。仙台湾~東京湾では3千~7千頭、伊勢湾・三河湾では2千~3千頭、瀬戸内海~玄界灘では7千~9千頭、大村湾では数百頭、有明海・橘湾では2千~3千頭という推定値が得られています。今のところ過去に瀬戸内海で経験したような顕著な減少が認められている海域はありません。ただし、東日本大震災後に、仙台湾~九十九里浜沖で行われた調査では、過去に実施された調査より推定値が低くなり、生息数の減少が懸念されています。

5. 東京湾のスナメリ

東京湾には古くからスナメリが生息していたようです。東京湾で長年漁を営む漁業者はスナメリのことをよく知っています。1997年にアクアラインが開通する前に東京湾を横断して神奈川県と千葉県を結んでいたフェリーからスナメリを見ることもあったそうです。群泳するスナメリの写真も残されています。最近の研究によると、東京湾は、スナメリの

生息適地であることが示唆されています。ある海域にスナメリが分布する確率を、その場所の水深、岸からの距離などを用いて推定するモデルを東京湾に当てはめたところ、多くのスナメリが生息して

いてもおかしくないという結果が得られました。しかし、今日では泳いでいるスナメリや、海岸に打ち上がった個体が稀に見つかるだけで、スナメリのことを知らない若い漁業者も現れています。実際、2000年以後に東京湾とその南の浦賀水道で実施された目視調査では、スナメリの発見はほとんどありません。少なくとも4つのチームが異なる時期に飛行機を飛ばしてスナメリを探しましたが、2群5頭の発見があったのみです。船舶を使用した目視調査も行われましたが、数頭のスナメリが発見されたに過ぎません。東京湾のスナメリは本格的な調査が始まる前に減少してしまったと考えられます。

瀬戸内海のスナメリの生息数の減少に影響を与えた要因として、刺し網など漁業による混獲死、船舶によ

る事故死、残留性の汚染物質による健康被害、埋め立てや海砂利採取など生息環境の破壊などがあげられています。東京湾のスナメリにも瀬戸内海と同様な人為的な要因が作用したと推察されます。

6. 保全の課題 生息地利用

スナメリがどこをどのように利用しているかは保全上重要な情報です。有明海・橘湾では、出生直後のコドモは、外洋へ続く橘湾ではなく、有明海の湾奥から湾中で発見されました。九十九里浜では、出生直後のコドモの発見場所は限られているようです。これらはスナメリの出産に適した海域があることを示唆していますが、スナメリの出産海域を特定することは極めて困難です。

鹿島灘にはスナメリが長時間滞在する港があります。港内を見渡すことができる展望台が近くにあり、そこから港内に入ってくるスナメリを観察することができます(写真9、10)。



写真9 スナメリが利用する港

港内にスナメリの親子が入ってくる
ことがあります。出生直後のコドモの
大きさは母親の半分ほど、体色は
黒っぽいのが特徴です。おもしろい
ことに、港に出入りする時には、コ
ドモは母親にぴったりと寄り添って
泳いでいるのですが、港内では、
母親は採餌を始めるようで、コドモ
と母親の間に距離ができます。コド
モが母親と離れて異なる方向に泳い
でいたり、離れたところにいる母
親のほうに戻ってきたりする姿を見
ます。このような場所に漁網などが設
置されていたら、コドモが絡まって
しまう危険性が高いかもしれませ
ん。有明海・橘湾では混獲されて
標本として提供された個体の半分は
1才以下のコドモでした。

スナメリはどのような海域で子育
てをするのか、親子が利用する海域
は他個体と異なるのかは明らかにな
っていません。東京湾では出生直
後のコドモのスナメリが稀に見つ
かれますが、生後1年前後のコドモ
の記録はありません。産まれたコド
モの成長に良好な環境が残っていな
い



写真10 展望台からのスナメリの観察風景

でしょうか。スナメリの育児海域の
特性を探るための調査が開始されて
います。

7. おわりに

スナメリの生息数は瀬戸内海で
減少したことが明らかになりました。
伊勢湾では聞き取り調査を行った漁
業者の70%がスナメリは減ったと答
えたそうです。東京湾でもスナメリ
は遠い存在になってしまいました。
スナメリを普通に見られた海が、ス
ナメリを減多に見ない海に変わっ
てしまったのです。

スナメリの生息数の動向を監視す
るために広域にわたる生息状況調
査が繰り返し実施されていますが、
推定精度が悪い場合は、数の減少
を検出することが困難になります。
飛行機を使った目視調査で得られ
た推定値は見落とし率を考慮してい
ないため過小推定になっています
が、気がついた時には数が減少し
ていたということにならないよう
に、直接死亡に結びつく混獲や船舶
との衝突に関する実態調査も必要で
す。筆者らが有明海・橘湾
で一部の漁業者を対象として実施
した聞き取り調査では1年間に30
頭余りのスナメリが混獲されてい
ました。その値をもとに全体の混
獲個体数を推定すると数百頭に達
しました。個体群の存続に明らか
に影響を与える

数値です。この調査が行われた年
に特別に多くのスナメリが混獲さ
れたのかもしれませんが。スナメリ
を混獲する漁具を多用していた漁
業者がたまたま聞き取り調査の対
象となったために推定値が過大に
なった可能性もあります。今後は、
混獲の実態を正確に把握し、個体
群に与える影響を評価し、もし多
大な影響を与えているのであれば
対策を検討することが重要です。

●引用文献

1) 粕谷俊雄. 2010. 瀬戸内海のスナメリの
現状と保全. 奇跡の海 瀬戸内海・上関
の生物多様性(日本生態学会上関要望書
アフターケア委員会編), pp.76-108. 南
方新社, 鹿児島.

2) Shirakihara, M. and Yoshioka, M. 2015.
Neophocaena asiaeorientalis (Pilleri &
Gihl, 1972). The Wild Mammals of Japan,
2nd edition.(S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi,
M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.), pp.
390-391. Shoukadoh, Kyoto.

3) 白木原美紀. 2011. 東京湾におけるスナ
メリの生息状況. 東京湾 人と自然のか
かわりの再生(東京湾海洋環境研究委員
会編), pp199-203. 恒星社厚生閣, 東京.



白木原 美紀
しらぎはら・みぎ

静岡県出身、長崎大学大学院海洋生産科学
研究科修士、博士(学術)。現在、東邦大学理
学部東京湾生態系研究センター訪問研究
員。ミナミハンドウイルカ、スナメリなど沿岸性
のイルカ類を対象としたフィールドワークに従
事。主な著書に「ケツスの知恵 イルカとクジ
ラのサイエンス」(分担執筆、東海大学出版
会)、「イルカ・クジラ学 イルカとクジラの謎に
挑む」(分担執筆、東海大学出版会)